

鼠小僧次郎吉

芥川龍之介

青空文庫

或初秋の日暮であつた。

汐留しほどめの船宿、伊豆屋の表二階には、遊び人らしい二人の男が、さつきから差し向ひで、頻しきりに献酬けんしゅうを重ねてゐた。

一人は色の浅黒い、小肥りに肥つた男で、形かたの如く結城ゆふきの单ひとへ衣物ものに、八反の平ぐけを締めたのが、上に羽織こわたつた古渡りたうざ唐たうざ棧さんの半天と一しよに、その苦みばしつた男ぶりを、一層いなせ

に見せてゐる趣があつた。もう一人は色の白い、どちらかと云へば小柄な男だが、手首まで彫つてある割ほりもの青あおが目立つせゐるか、糊のり

の落ちた小弁慶の単衣物に算盤珠そろばんだまの三尺をぐるぐる巻きつけたのも、意気と云ふよりは寧ろむし凄味のある、自墮落な心もちしか起させなかつた。のみならずこの男は、役者が二三枚落ちると見えて、相手の男を呼びかける時にも、始終親分と云ふ名を用ひてゐた。が、年輩は彼かれ是これ同じ位らしく、それだけ又世間の親分子分よりも、打ち融うとけた交情が通つてゐる事は、互に差しつ抑へつする盃の間にも明らかだつた。

初秋の日暮とは云ひながら、向うに見える唐津様からつの海鼠壁なまこかべには、まだ赤々と入日がさして、その日を浴びた一株の柳が、こんもりと葉かげを蒸してゐるのも、去つて間がない残暑の思ひ出を新しくするのに十分だつた。だからこの船宿の表二階にも、葭戸よしど

こそもう唐紙からかみにやつてゐたが、江戸に未練の残つてゐる夏は、
手すりに下つてゐる伊予簾いよすだれや、何時からか床に掛け残された墨
絵の滝の掛物や、或は又二人の間に並べてある膳の水貝や洗ひな
どに、まざまざと尽きない名残りを示してゐた。實際往来を一つ
隔へだててゐる掘割の明るい水の上から、時たま此処に流れて来るそ
よ風も、微醺びくんを帯びた二人の男には、刷毛先はけさきを少し左へ曲げた水
髪の鬢びんを吹かれる度に、涼しいとは感じられるにした所が、毛頭
秋らしいうそ寒さを覚えさせるやうな事はないのである。殊に色
の白い男の方になると、こればかりは冷たさうな掛守かけまもりの銀鎖
もちらつく程、思入れ小弁慶の胸をひろげてゐた。

二人は女中まで遠ざけて、暫くは何やら密談ふけに耽つてゐたが、

やがてそれも一段落ついたと見えて、色の浅黒い、小肥りに肥つた男は、無造作に猪口ちよくを相手に返すと、膝の下の煙草入をとり上げながら、

「と云ふ訳での、おれもやつと三年ぶりに、又江戸へ歸つて来たのよ。」

「道理でちつと御歸りが、遅すぎると思つてゐやしたよ。だがまあ、かうして歸つて来ておくんなさりや、子分子方のものばかりぢや無ねえ、江戸つ子一統が喜びやすぜ。」

「さう云つてくれるのは、手前てめえだけよ。」

「へへ、仰おつしや有つたものだぜ。」

色の白い、小柄な男は、わざと相手を睨にらめると、人が悪るさう

ににやりと笑つて、

「小花姐ねえさんにも聞いて御覧なせえまし。」

「そりや無ねえ。」

親分と呼ばれた男は、如心形によしんがたの煙管きせるを啣くはへた儘、僅に苦笑の色を漂はせたが、すぐに又真面目まじめな調子になつて、

「だがの、おれが三年見無ねえ間に、江戸もめつきり變つたやうだ
」。

「いや、變つたの、變ら無えの。岡場所さびなんぞの寂れ方と来ちや、
まるで嘘のやうでござえますぜ。」

「かうなると、年よりの云ひぐさぢや無えが、やつぱり昔が恋し
いの。」

「変ら無えのは私ばかりさ。へへ、何時になつてもひつてんだ。」

小弁慶の浴衣ゆかたを着た男は、受けた盃をぐいとやると、その手ですぐに口の端の滴を払つて、自ら嘲あざけるやうに眉を動かししたが、

「今から見りや、三年前は、まるでこの世の極楽さね。ねえ、親分、お前さんが江戸を御売んなすつた時分にや、盗ぬすつ人にせえあの鼠小僧のやうな、石川五右衛門とは行かねえまでも、ちつとは睨にらみの利きいた野郎があつたものぢやござえませんか。」

「飛んだ事を云ふぜ。何処の国におれと盗つ人とを一つ扱ひにする奴があるものだ。」

唐たうざん棧の半天をひつかけた男は、煙草の煙にむせながら、思はず又苦笑を洩らしたが、鉄火な相手はそんな事に頓着けしきする気色も

なく、手酌でもう一杯ひつかけると、

「そいつがこの頃は御覧なせえ。けちな稼ぎをする奴は、はうき箒で掃く程ゐやすけれど、あの位なくれえ大泥坊は、つひぞ聞か無えぢやござえませんか。」

「聞か無えだつて、好いぢや無えか。国に盜賊、家に鼠だ。大泥坊なんぞはゐ無え方が好い。」

「そりや居無え方が好い。居無え方が好いにや違えござえませんがね。」

色の白い、小柄な男は、ほりもの割青のあるひぢ臂を延べて、ちやく親分へ猪口を差しながら、

「あの時分の事を考へると、へへ、妙なもので盜つ人せえ、懐し

くなつて来やすのさ。先刻御承知にや違え無えが、あの鼠小僧と云ふ野郎は、心意気が第一嬉しいや。ねえ、親分。」

「嘘は無え。盗つ人の尻押しにや、こりや博奕打ばくちうちが持つて来いだ。」

「へへ、こいつは一番おそれるか。」

と云つて、ちよいと小弁慶の肩を落したが、こちらは忽ち又元気な声になつて、

「私わっちだつて何も盗つ人の肩を持つにや当ら無えけれど、あいつは懐あつたけの暖え大名屋敷へ忍びこんぢや、御手許金と云ふやつを搔かつさら攫つて、その日に追はれる貧乏人へ恵んでやるのだと云ひやすぜ。

成程なるほど善悪にや二つは無えが、どうせ盗みをするからにや、悪党

冥利みやうりにこの位くれえな陰徳は積んで置き度てえとね、まあ、私わつちなんぞは思つてゐやすのさ。」

「さうか。さう聞きや無理は無えの。いや、鼠小僧と云ふ野郎も、改代町かいだいまちの裸はだかまつ松ひいきが鼠ひいき貞ひいきになつてくれようとは、夢にも思つちや居無えだらう。思へば冥みやう加がな盗つ人だ。」

色の浅黒い、小肥りに肥つた男は、相手に猪口を返しながら、思ひの外しんみりとかう云つたが、やがて何か思ひついたらしく、大様に膝を進めると、急に晴々した微笑を浮べて、

「ぢや聞きねえ。おれもその鼠小僧ぢや、とんだ御茶番を見た事があつての、今でも思ひ出すたんびに、腹の皮がよれてなら無ねえのよ。」

親分と呼ばれた男は、かう云ふ前置きを聞かせてから、又悠々と煙管きせるを啣くはへて、夕日の中に消えて行く煙草の煙の輪と一しよに、次のやうな話をし始めた。

二

丁度今から三年前、おれが盆ぼん莫ご塵ざの上の達たて引ひきから、江戸を売つた時の事だ。

東海道にやちつと差しがあつて、路は悪いが甲州街道を身延みのぶまで出にやなら無えから、忘れもし無え、極ごく月げつの十一日、四谷の荒木町を振り出しに、とうとう旅たび鴉がらすに身をやつしたが、なり

は手前も知つてた通り、結城紬の二枚重ねに一本独鈷の博多の
 帯、道中差をぶつこんでの、革色の半合羽に菅笠をかぶつ
 てゐたと思ひねえ。元より振分けの行李の外にや、道づれも無え
 独り旅だ。脚絆草鞋の足拵へは、見てくればかり軽さうだ
 が、当分は御膝許の日の目せえ、拝まれ無え事を考へりや、実
 は気も滅入つての、古風ぢやあるが一足毎に、後髪を引かれるや
 うな心もちよ。

その日が又意地悪く、底冷えのする雪曇りでの、まして甲州街
 道は、何処の山だか知ら無えが、一面の雲のかかつたやつが、枯
 つ葉一つがさつか無え桑畑の上に屏風を立てよ、その桑の枝を
 掴んだ鶉も、寒さに咽喉を痛めたのか、声も立て無えやうな凍て

方だ。^{かた}おまけに時々身を切るやうな、^{こぼとけおろし}小仏風のからつ風がや
けにぎつと吹きまくつて、横なぐれに合羽を煽あふりやがる。かうな
つちやいくら威張つても、旅慣れ無え江戸つ子は形無しよ。おれ
は菅笠の縁に手をかけちや、今朝四谷から新宿と踏み出して来た
江戸の方を、何度振り返つて見たか知れやし無え。

するとおれの旅慣れ無えのが、通りがかりの人目にも、氣の毒
たらしかつたのに違え無え。府中の宿しゆくをはづれると、堅氣らしい
若え男が、後からおれに追ひついて、口まめに話しかけやがる。
見りや紺の合羽に菅笠は、こりや御定りの旅仕度だが、色の褪さめ
た唐棧たうざんの風呂敷包を頸くびへかけの、洗ひざらした木綿縞もめんじまに剥げ
つちよろけの小倉こくらの帯、右の小鬢こびんに禿はげがあつて、顛あごの悪くしやく

れたのせえ、よしんば風にや吹かれ無えでも、懐の寒むさうな御ごにんてえ人体だ。だがの、見かけよりや人は好いと見えて、親切さうに道中の名所古蹟なんぞを教へてくれる。こつちは元より相手欲しやだ。

「御前さんは何処まで行きなさる。」

「わつし私は甲府まで参りやす。旦那は又どちらへ。」

「わたし私は何、身延詣りさ。」

「時に旦那は江戸でござりやせう。江戸はどの辺へ御住ひなせえ
ます。」

「かやばちやう茅場町のうゑきだな植木店さ。お前さんも江戸かい。」

「わつしへえ、私は深川のろくけんぼり六間堀で、これでも越後屋重吉と云ふ小間

物渡世とせいでござりやす。」

とまあ、云つた調子での。同じ江戸懐しい話をしながら、互に
好い道づれを見つけた気でよ、一しよに路を急いで行くと、追つ
け日野宿ひのしゆくへかからうと云ふ時分に、ちらちら白い物が降り出し
やがった。独り旅であつて見ねえ。時刻も彼かれ是これ七つ下りぢやあ
るし、この雪空を見上げちや、川千鳥の声も身に滲しみるやうで、
今夜はどうでも日野泊りと、出かけ無けりやなら無え所だが、い
くら懐は寒むさうでも、其処は越後屋重吉と云ふ道づれのある御
かげ様だ。

「旦那え、この雪ぢや明日あすの路は、とても捗はかが参りやせんから、
今日の中に八王子までのして置かうぢやござりやせんか。」

と云はれて見りや、その気になつての、雪の中を八王子まで、
辿りつたどいたと思ひねえ。もう空はまつ暗で、とうに白くなつた両
側の屋根が、夜目にも跡の見える街道へ、押つかぶさるやうに重
なり合つた、——その下に所々、掛行燈かけあんどうが赤く火を入れて、帰
り遅れた馬の鈴が、だんだん近くなつて来るなんぞは、手もなく
浮世画の雪景色よ。するとその越後屋重吉と云ふ野郎が、先に立
つて雪を踏みながら、

「旦那え、今夜はどうか御一しよに願ひたうござりやす。」

と何度もうるさく頼みやがるから、おれも異存がある訳ぢやな
し、

「そりやさう願へれば、私も寂しくなくつて好い。だが私は生あいに

憎くと、始めて来た八王子だ。何処も旅籠はたごを知ら無えが。」

「何なに、あすこの山やましん甚と云ふのが、私わつしの定ぢやうやど宿しゆくでござりやす

。」

と云つておれをつれこんだのは、やつぱり掛行燈のともつてゐる、新見世だとか云ふ旅籠屋だかの、入口の土間を広くとつて、

その奥はすぐに台所へ続くやうな構へだつたらしい。おれたち二人が中へ這入はひると、帳場の前の獅嚙しがみ火鉢へ嚙りついてゐた番頭が、

まだ「御濯おすすぎを」とも云は無え内に、意地のきたねえやうだけれ

ど、飯の匂と汁の匂とが、湯気や火つ氣と一つになつて、むんと

鼻へ来やがつた。それから早速草鞋わらぢを脱ぎの、行燈を下をんなげた婢と

一しよに、二階座敷へせり上つたが、まづ一風呂暖まつて、何は

ともあれ寒さ凌ぎと、熱燗で二三杯きめ出すと、その越後屋重吉と云ふ野郎が、始末に了へ無え機嫌上戸での、唯でせえ口のまめなやつが、大方饒舌る事ぢや無え。

「旦那え、この酒なら御口に合ひやせう。これから甲州路へかかつて御覧なさいやし。とてもかう云ふ酒は飲めませんや。へへ、古い洒落だが与右衛門の女房で、私ばかりかさねがさね——」

などと云つてゐる内は、まだ好かつたが、銚子が二三本も並ぶやうになると、目尻を下げて、鼻の脂を光らせて、しやくんだ顔を乙に振つて、

「酒に恨が数々ござるつてね、私なんでも旦那の前だが、茶屋酒のちいつとまはり過ぎたのが、飛んだ身の仇になりやした。あ、

あだな潮来で迷はせるつ。」

とふるへ声で唄ひ始めやがる。おれは実に持て余しての、何でもこいつは寝かすより外に仕方が無えと思つたから、潮さきを見て飯にすると、

「さあ、明日が早えから、寝なせえ。寝なせえ。」

とせき立てての、まだ徳利とつくりに未練のあるやつを、やつと横にならせたが、御方便なものぢや無えか、あれ程はしやいでゐた野郎が、枕へ頭をつけたとなると、酒臭え欠伸あくびを一つして、

「あああつ、あだな潮来で迷はせるつ。」

ともう一度、気味の悪い声を出しやがったが、それつきり後はいびき鼾になつて、いくら鼠が騒がうが、寝返り一つ打ちやがら無え。

が、こつちや災難だ。何を云ふにも江戸を立つて、今夜が初めての泊りぢやあるし、その鼾が耳へついて、あたりが静になりやなる程、反つて妙に寝つかれ無え。外はまだ雪が止ま無えと見えて、時々雨戸へさらさらと吹つかける音もするやうだ。隣に寝てゐる極道人ごくどうにんは、夢の中でも鼻唄を唄つてゐるかも知ら無えが、江戸にやおれがゐ無えばかりに、一人や二人は夜の目も寝無えで、案じてゐてくれるものがあるだらうと、——これさ、のろけぢや無えと云ふ事に、——つまら無え事を考へると、猶なほの事おれは眼が冴さえての、早く夜明けになりや好いと、そればつかり思つてゐた。

そんなこんなで九つも聞き、八つを打つたのも知つてゐたが、

その内に眠む気がさしたと見えて、何時いつかうとうとしたやうだつた。が、やがてふと眼がさめると、鼠が燈心でも引きやがったか、枕もとの行燈が消えてゐる。その上隣に寝てゐる野郎が、さつきまでは鼾をかいてゐた癖に、今はまるで死んだやうに寢息一つさせやがら無え。はてな、何だか可笑をかしな容子ようすだぞと、かう思ふか思は無え内に、今度はおれの夜具の中へ、人間の手が這入つて来やがった。それもがたがたふるへながら、胴巻の結び目を探しやがるのよ。成程。人は見かけにやよら無えものだ。あのでれ助が胡麻ごまの蠅とは、こいつはちいつと出来すぎたわい。——と思つたら、すんでの事に、おれは吹き出す所だつたが、その胡麻の蠅と今が今まで、一しよに酒を飲んでゐたと思や、忌いま々しくもなつ

て来ての、あの野郎の手が胴巻の結び目をほどきにかかりやがる
と、いきなり逆にひつ掴めえて、捻り上げたと思ひねえ。胡麻の
蠅の奴め、驚きやがるめえ事か、慌てて振り放さうとする所を、
夜具を頭から押つかぶせての、まんまとおれがその上へ馬乗りに
なつてしまつたのよ。するとあの意気地なしめ、無理無体に夜具
の下から、面だけ外へ出したと思ふと、「ひ、ひ、ひ、人殺し」と、
烏骨鶏をこつけいが時でもつくりやしめえし、奇体きてえな声を立てやがつた。
手前てめえが盗みをして置きながら、手前で人を呼びや世話は無え、唐
変木うへんぼくとは始めから知つちやあるが、さりとは男らしくも無え野
郎だと、おれは急に腹が立つたから、其処にあつた枕をひつ掴ん
で、ぽかぽかその面つらをぶちのめしたぢや無えか。

さあ、その騒ぎが聞えての、隣近所の客も眼をさましや、宿の亭主や奉公人も、何事が起つたと云ふ顔色で、手燭の火を先立ちに、どこどこか二階へ上つて来やがった。来て見りやおれの股ぐらから、あの野郎がもう片息になつて、面妖めんえうな面つらを出してゐやがる始末よ。こりや誰が見ても大笑ひだ。

「おい、御亭主、飛んだ蚤のみにたかられての、人騒がせをして済まなかつた。外ほかの客人にやお前から、よく詫びを云つておくんなせえ。」

それつきりよ。もう後は訳を話すも話さ無えも無え。奉公人がすぐにあの野郎を、ぐるぐる巻にふん縛つて、まるで生捕りしましたかつば河童のやうに、寄つてたかつて二階から、引きずり下してしま

やがった。

さてその後で山甚の亭主が、おれの前へ手をついての、

「いや、どうも以ての外の御災難で、さぞまあ、御驚きでございましたらう。が、御路用その外別に御紛失物ごぶんじつものもなかつたのは、

せめてもの御仕合せでございます。追つてはあの野郎も夜の明け次第、早速役所へ引渡す事に致しますから、どうか手前どもの届きません所は、幾重にも御勘弁下さいますやうに。」

と何度も頭を下げるから、

「何、胡麻の蠅とも知ら無えで、道づれになつたのが私の落度だ。それを何も御前おめえさんが、あやまんなさる事は無えのさ。こりやほんの僅ばかりだが、世話になつた若え衆わげしゆたちに、暖え蕎麦そばの一杯

も振舞つてやつておくんなせえ。」

と祝儀をやつて返したが、つくづく一人になつて考へりや、宿場女郎にでも振られやしめえし、何時までも床に倚よつかかつて、腕組みをしてゐるのも智慧ちゑが無え。と云つてこれから寝られやせず、何かと云ふ中にや六つだらうから、こりや一そ今の内に、ちつとは路が暗くつても、早立ちをするのが上分別だと、かう思案がきまつたから、早速身仕度にとりかかりの、勘定は帳場で払つて行かうと、外の客の邪魔になら無えやうに、そつと梯子はしごぐち口まで来て見ると、下ぢやまだ奉公人たちが、皆起きてゐると見えて、何やら話し声も聞えてゐる。するとその中うちにどう云ふ訳か、度々さつき手前てめえの話した、鼠小僧と云ふ名が出るぢや無えか。おれは

妙だと思つての、両掛の行李を下げた儘、梯子口から下を覗いて見ると、広い土間のまん中にや、あの越後屋重吉と云ふ木念人ぼくねんじんが、繩尻は柱に括くくられながら、大あぐらをかいてゐやがる。そのまはりにや又若え者が、番頭も一しよに三人ばかり、八間はちけんの明りに照らされながら、腕まくりをしてゐるぢや無えか。中でもその番頭が、片手に算盤そろばんをひつ掴みの、薬罐頭やくわんあたまから湯氣を立てて、忌々しさうに何か云ふのを聞きや、

「ほんによ、こんな胡麻の蠅も、今に劫羅こくらを経て見さつし、鼠小僧なんぞはそのけの大泥坊になるかも知れ無え。ほんによ、さうなつた日にやこいつの御蔭で、街道筋の旅籠屋はたごやが、みんな暖簾のれんに瑕きずがつくわな。その事を思や今の内に、ぶつ殺した方が人助け

よ。」

と云ふ側から、ぢぢむさく髭ひげの伸びた馬子まご半天ぼんでんが、じろじろ胡麻の蠅つらの面を覗きこんで、

「番頭どんともあらうものが、いやはや又あ当ごて事も無え事を云つたものだ。何でこんな間拔野郎に、鼠小僧の役が勤るべい。大方胡麻の蠅も気が強えと云つたら、面つらを見たばかりでも知れべいわさ。」

「違え無え。高々いたちこぞう鼬えもの小僧位な所だらう。」

こりや火吹竹を得物えものにした、宿の若え者が云つた事だ。

「ほんによ。さう云やこの野猿坊やゑんぼうは、人の胴巻もまだ盗ま無え内に、うぬふんどしが禪ぜんを先へ盗まれさうな面だ。」

「下手な道中稼ぎなんぞするよりや、棒つ切の先へ黏とりもちをつけの、子供と一しよに賽さい銭箱せんばこのびた銭でもくすねてゐりや好い。」

「何、それよりや案山かかし子代りに、おらが後の粟畑へ、突つ立つてゐるが好かんべい。」

かう皆がなぶり物にすると、あの越後屋重吉め、ちつとの間は口惜しさうに眼ばかりぱちつかせてゐやがつたが、やがて宿の若え者が、火吹竹を顛あごの下へやつて、ぐいと面を擡もたげさせると、急に巻き舌になりやがつて、

「やい、やい、やい、こいつらは飛んだ奴ぢやねえかえ。誰だと思つて嚙たはごと言をつきやがる。かう見えても、この御おあにい兄さんはな、日本中を股にかけた、ちつとは面の売つちれてゐる胡麻の蠅だ。不面

目にも程があらあ。うぬが土百姓の分在で、利いた風な御託ごたくを並べやがる。」

これにや皆驚いたのに違え無え。実は梯子を下りかけたおれも、あんまりあの野郎の権幕ごたいが御大さうなものだから、又中段に足を止めて、もう少し下の成行きを眺めてゐる氣になつたのよ。まして人の好きさうな番頭なんぞは、算盤まで持ち出したのも忘れたやうに、呆れてあの野郎を見つめやがつた。が、氣の強えのは馬子半天での、こいつだけはまだ髭を撫でながら、何処を風が吹くと云ふ面で、

「何が胡麻の蠅がえらかんべい。三年前の大夕立に雷らい獸じゅう様を手捕りにした、横山宿じゆくの勘太とはおらが事だ。おらが身もんでえを

一つすりや、うぬがやうな胡麻の蠅は、踏み殺されると云ふ事を
 知ん無えか。」

と嵩かさにかかつて嚇おどしたが、胡麻の蠅の奴はせせら笑つて、
 「へん、こけが六十六部に立たて山やまの話でも聞きやしめえし、頭か
 らおどかしを食つてたまるものかえ。これやい、眠む氣ざましに
 や勿体無えが、おれの素す性じやうを洗つてやるから、耳の穴を搔つば
 じつて聞きやがれ。」

と声こゝろ色いろにしちや語呂の悪い、啖たん呵かを切り出した所は豪勢だが
 の、面つらを見りや寒いと見えて、水みづつ洩ぼが鼻の下に光つてゐる。お
 まけにおれのなぐつた所が、小鬢こびんの禿から顛へかけて、まるで面
 が歪ゆがんだやうに、脹はれ上つてゐようと云ふものだ。が、それでも

あなかも
田舎者にや、あの野郎のほんぽん云ふ事が、ちつとは効き目が

あつたのだらう。あいつが乙に反り身になつて、餓鬼の時から悪事を覚えた行き立てを饒舌しやべつてゐる内にや、雷獣を手捕りにしたとか云ふ、髭のぢぢむせえ馬子半天も、追々あの胡麻の蠅を胴突どつかなくなつて来たぢや無えか。それを見るとあの野郎め、愈いよいよしやくんだ顚を振りの、三人の奴らをねめまはして、

「へん、このごつぼう人めら、手前たちてめえを怖はがるやうな、よいだとても思やがつたか。いんにやさ。唯の胡麻の蠅だと思ふと、相手が違ふぞ。手前たちも覚えてゐるだらうが、去年の秋の嵐の晩に、この宿しゆくの庄屋へ忍びこみの、有り金を残らず搔かつ攫さらつたのは、誰でも無えこのおれだ。」

「うぬが、あの庄屋様へ、——」

かう云つたのは、番頭ばかりぢや無え。火吹竹を持つた若え者も、さすがに肝をつぶしたと見えて、思はず大きな声を出しながら、二足三足後へ下りやがった。

「さうよ。そんな仕事に驚くやうぢや、手前たちはまだ甘えものだ。かう、よく聞けよ。ついこの中ちゆうも小仏峠で、金飛脚かねびきやくが二人殺されたのは、誰の仕業だと思やがる。」

あの野郎は水みづつ涕ぼなをすすりこんぢや、やれ府中で土蔵を破つたの、やれ日野宿でつけ火をしたの、やれ厚木街道の山の中で巡礼の女をなぐさんだの、だんだん途方も無え悪事を饒舌しゃべり立てたが、妙な事にやそれにつれて、番頭始め二人の野郎が、何時の間にか

あの木念人へいんぎん慇懃ばかぢからになつて来やがつた。中でも凶体の大きな馬子半天が、莫迦力ばかぢからのありさうな腕を組んで、まじまじあの野郎の面を眺めながら、

「お前さんと云ふ人は、何たる又悪党だんべい。」

と唸るやうな声を出した時にや、おれは可笑しさがこみ上げての、あぶなく吹き出す所だつた。ましてあの胡麻の蠅が、もう酔もさめたのだらう、如何にも寒さうな顔色で、齒の根も合は無え程ふるへながら、口先ばかりや勢よく、

「何と、ちつとは性根がついたか。だがおれの官禄は、まだまだそんな事ぢや無え。今度江戸をずらかつたのは、へそくりがね臍繰へそくりがね金がねが欲しいばかりに二人と無え御袋を、おれの手にかけて絞め殺した、そ

の化の皮が剥げたからよ。」

と大きな見得を切つた時にや、三人ともあつと息を引いての、千両役者でも出て来はしめえし、小鬢から脹れ上つたあいつの面を、難有さうに見つめやがつた。おれはあんまり莫迦ばからしいから、もう見てゐるがものは無えと思つて、二三段梯子を下りかけたが、その途端に番頭の薬罐頭め、何と思やがつたか横手を打つて、

「や、読めたぞ。読めたぞ。あの鼠小僧と云ふのは、さてはおぬあだなしの渾名あだなだな。」

と頓狂な声を出しやがつたから、おれはふと又気が變つて、あいつが何とぬかしやがるか、それが聞きたさにもう一度、うすつ暗え梯子の中段へ足を止めたと思ひねえ。するとあの胡麻の蠅め、

じろりと番頭を睨みながら、

「凶星を指されちや仕方が無え。如何にも江戸で噂の高え、鼠小僧とはおれの事だ。」

と横柄にせせら笑やがつた。が、さう云ふか云は無え内に、胸震ひを一つしたと思ふと、二つ三つ続けさまに色気の無え嚏くしゃみをしやがつたから、折角の睨みも台無しよ。それでも三人の野郎たちは、勝角かちずまふ力ちからの名乗りでも聞きやしめえし、あの重吉の間拔野郎を煽ぎ立て無えばかりにして、

「おらもさうだらうと思つてゐた。三年前の大夕立に雷獣様を手捕りにした、横山宿の勘太と云つちや、泣く児も黙るおらだんべい。それをおらの前へ出て、びくともする容子ようすが見え無えだ。」

「違え無え。さう云やどこか眼の中に、すすどい所があるやうだ。」

「ほんによ、だからおれは始めから、何でもこの人は一つぱしの大泥坊になると云つてゐたわな。ほんによ。今夜は弘こうぼふ法にも筆の誤り、上手じやうずの手からも水が漏るす。漏つたが、これが漏ら無えで見ねえ。二階中の客は裸にされるぜ。」

と繩こそ解かうとはし無えけれど、口々にちやほやしやがるのよ。すると又あの胡麻の蠅め、大方威張る事ぢや無え。

「かう、番頭さん、鼠小僧の御宿をしたのは、御前おめえの家の旦那が運が好いのだ。さう云ふおれの口を干しちや、旅籠屋はたごや冥利みやうりが尽きるだらうぜ。柵ますで好いから五合ばかり、酒をつけてくんねえな

。
┌

かう云ふ野郎も凶々しいが、それを又正直に聞いてやる番頭も
間抜けぢや無えか。おれは八間の明りの下で、薬罐頭の番頭が、
あの飲んだくれの胡麻の蠅に、梘の酒を飲ませてゐるのを見たら、
何もこの山甚の奉公人ばかりとは限ら無え、世間の奴等の莫迦莫
迦をかしさが、可笑をかしくつて、可笑しくつて、こてえられ無かつた。
何故と云ひねえ。同じ悪党とは云ひながら、押込みよりや搔払ひ、
火つけよりや巾着きんちやくきり切が、まだしも罪は軽いぢや無えか。それ
なら世間もそのやうに、大盗つ人よりや、小盗つ人に憐みをかけ
てくれさうなものだ。所が人はさうぢや無え。三下野郎にやむご
くつても、金箔つきの悪党にや向うから頭を下げやがる。鼠小僧

と云や酒も飲ますが、唯の胡麻の蠅と云や張り倒すのだ。思やおれも盗つ人だつたら、小盗つ人にやなりたく無え。——とまあ、おれは考へたが、さて何時までも便々と、こんな茶番も見ちやゐられ無えから、わざと音をさせて梯子を下りの、上り口へ荷物を抛り出して、

「おい、番頭さん、私は早立ちと出かけるから、ちよいと勘定をしておくなせえ。」

と声をかけると、いや、番頭の薬罐頭め、てれまい事か、慌てて枒を馬子半天に渡しながら、何度も小鬢こびんへ手をやつて、

「これは又御早い御立ちで——ええ、何とぞ御腹立ちになりやせんやうに——又先程は、ええ、手前どもにもわざわざ御心づけを

頂きまして——尤も好い塩梅あんばいに雪も晴れたやうでげすが——」

などと訳のわからねえ事を並べやがるから、おれは可笑しさも可笑しくなつて、

「今下りしなに小耳に挟んだが、この胡麻の蠅は、評判の鼠小僧とか云ふ野郎ださうだの。」

「へい、さやうださうで、——おい、早く御草鞋おわらぢを持つて来さつし。御笠に御合羽は此処にありと——どうも大した盗つ人ださうでげすな。——へい、唯今御勘定を致しやす。」

番頭のやつはてれ隠しに、若え者を叱りながら、そこそこ帳場の格子かうしの中へ這入ると、仔細しさいらしく御筆くはで算盤ふでをぱちぱちやり出しやがった。おれはその間に草鞋をはいて、さて一服吸ひつけ

たが、見りやあの胡麻の蠅は、もう御神酒がまはつたと見えて、
 小鬢こびんの禿まで赤くしながら、さすがにちつとは恥しいのか、なる
 べくおれの方を見無えやうに、側眼わきめばかり使つてゐやがる。その
 見すぼらしい容子ようすを見ると、おれは今更のやうにあの野郎が可哀
 さうにもなつて来たから、

「おい、越後屋さん。いやさ、重吉さん。つまら無え 冗談じようだんは
 云は無えものだ。御前おめえが鼠小僧などと云ふと、人の好い田舎者
 は本当にするぜ。それぢや割が悪からうが。」

と親切づくに云つてやりや、あの阿呆の合がふてんじやう天井てんじやうめ、まだ芝
 居がし足り無えのか、

「何だと。おれが鼠小僧ぢや無え？ 飛んだ御前は物知りだの。」

かう、旦那旦那と立ててゐりや——」

「これさ。そんな啖呵たんかが切りたけりや、此処こゝにゐる馬子や若え衆おめえが、丁度御前にや好い相手だ。だがそれもさつきからぢや、もう大抵切り飽きたらう。第一御前が紛れも無え日本一の大泥坊なら、何もすき好んでべらべらと、為にもなら無え旧悪を並べ立てる筈が無えわな。これさ、まあ黙つて聞きねえと云ふ事に。そりや御前が何でも彼かでも、鼠小僧だと剛情を張りや、役人始め眞実御前が鼠小僧だと思ふかも知れ無え。が、その時にや軽くて獄門、重はりつけくて磔はりつけは逃れ無えぜ。それでも御前は鼠小僧か、——と云はれたら、どうする気だ。」

とかう一本突つこむと、あの意気地なしめ、見る見る内に唇の

色まで変へやがつて、

「へい、何とも申し訳はござりやせん。実は鼠小僧でも何でも無え、唯の胡麻の蠅でござりやす。」

「さうだらう。さうなくつちや、なら無え筈だ。だが火つけや押込みまでさんざんしたと云ふからにや、御前おめえも好い悪党だ。どうせ笠の台は飛ぶだらうぜ。」

とかまち框で煙管をはたきながら、大真面目におれがひやかすと、あいつは酔もさめたと見えて、又水みづつ洩ぼなをすすりこみの、泣かねえばかりの声を出して、

「何、あれもみんな嘘でござりやす。私わつしは旦那に申し上げた通り、越後屋重吉と云ふ小間物渡世で、年にきつと一二度はこの街道を

のほりくだり
上 下 しやすから、善かれ悪しかれいろいろな噂を知つて居り

やすので、つい口から出まかせに、何でも彼でもぼんぼんと――」

「おい、おい、御前は今胡麻の蠅だと云つたぢや無えか。胡麻の蠅が小間物を売るとは、御入国以来聞か無え事だの。」

「いえ、人様の物に手をかけたのは、今夜がまだ始めてでござりやす。この秋女房に逃げられやして、それから引き続き不手まはりな事ばかり多うござりやしたから、貧すりや鈍すると申す通り、ふとした一時の出来心から、飛んだ失礼な真似を致しやした。」

おれはいくらとんちきでも、兎に角胡麻の蠅だとは思つてゐたから、かう云ふ話を聞かされた時にや、煙管へ煙草をつめかけた儘、あき呆れて物も云へなかつた。が、おれは呆れたただけだつたが、

馬子半天と若え者とは、腹を立てたの立て無えのぢやねえ。おれが止めようと思ふ内に、いきなりあの野郎を引きずり倒しの、

「うぬ、よくも人を莫迦にしやがったな。」

「その頬ほほげた桁を張りのめしてくれべい。」

と喚わめき立てる声の下から、火吹竹が飛ぶ、桁が降るよ。可哀さうに越後屋重吉は、あんなに横つ面を脹らした上へ、頭まで瘤しこぶだらけになりやがった。……

三

「話と云ふのはこれつきりよ。」

色の浅黒い、小肥りに肥つた男は、かう一部始終を語り終ると、今まで閑却されてゐた、膳の上の猪口ちよくを取り上げた。

向うに見える唐津様の海鼠壁なまこかべには、何時か入日の光がささなくなつて、掘割に臨んだ一株の葉柳にも、そろそろ暮色が濃くなつて来た。と思ふと三縁山増上寺の鐘の音が、静に潮の匂のする欄外の空気を揺ゆりながら、今更のやうに曆の秋を二人の客の胸にしみ渡らせた。風に動いてゐる伊予簾いよすだれ、御浜御殿の森の鴉からすの声、それから二人の間にある盃はいせん洗せんの水の冷たい光——女中の運ぶ燭台の火が、赤く火先ほさきを靡なびかせながら、梯子段の下から現はれるのも、もう程がないのに相違あるまい。

小弁慶ひとへの単衣ひとへを着た男は、相手が猪口をとり上げたのを見ると、

早速徳利の尻をおさへながら、

「いや、はや、飛んでも無えたはけがあるものだ。日本の盗人ぬすつとの守り本尊、私の鼠わつち鼠ひいきの鼠小僧を何だと思つてゐやがる。親分なら知ら無え事、私わつちだつたらその野郎をきつと張り倒してゐやしたぜ。」

「何もそれ程に業ごふを煮やす事は無え。あんな間拔な野郎でも、鼠小僧と名乗つたばかりに、大きな面が出来たことを思や、鼠小僧もさぞ本望だらう。」

「だつとつて御前おめえさん、そんな駈け出しの胡麻の蠅に鼠小僧の名をかたられちや——」

割ほりもの青のある、小柄な男は、まだ云ひ争ひたい気色けしきを見せたが、

色の浅黒い、唐棧の半天を羽織つた男は、悠々と微笑を含みながら、

「はて、このおれが云ふのだから、本望に違え無えぢや無えか。
手前てめえにやまだ明さなかつたが、三年前に鼠小僧と江戸で噂が高かつたのは——」

と云ふと、猪口を控へた儘、鋭くあたりへ眼をくばつて、
「この和泉屋の次郎吉の事だ。」

(大正八年十二月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月17日公開

2004年3月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

鼠小僧次郎吉

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>